

京都大学大学院文学研究科考古学専修・京都大学総合博物館 編 『京都大学総合博物館考古学資料目録—エジプト出土資料—』

京都大学総合博物館収蔵資料目録 1、京都大学総合博物館、2016 年 2 月、xxxi+161 頁

坂本 翼

Book Review: *Catalogue of the Egyptian Collection in the Kyoto University Museum.*

Edited by Kyoto University Department of Archaeology and Kyoto University Museum, Kyoto University Museum, 2016

Tsubasa SAKAMOTO

かつて、京都大学文学部陳列館 1 階北東隅の考古学第 2 陳列室に、エジプトから出土した多くの遺物が展示されていた。今日「京都大学エジプト・コレクション」（以下、コレクション）として知られるこの遺物は、周知の通り、京都帝国大学講師に任ぜられた濱田耕作が 1909 年から 1931 年にかけて将来したものである。コレクションが我が国のエジプト学の重要資料であることは早くから指摘されていたが、濱田が同大学に日本初の考古学講座を設置してから 100 年という節目に待望の目録が上梓され、ようやくその全貌が明らかになった。本稿では、書評という形を借りながらこのコレクションの重要性に改めて光を当ててみたい。

目録は、図版、例言、目次、細目次、古代エジプト史年表、エジプト遺跡地図、資料目録、解説からなる 200 頁弱の書籍である。例言（pp. xxi-xxii）によればこの書籍は、エジプト探査基金（Egypt Exploration Fund）とイギリス・エジプト考古学会（British School of Archaeology in Egypt）から寄せられた情報を頼りにコレクションを紹介したものとなる。各遺物の記載は写真に現れにくい特徴を重視したものとなっているが、これは、目録に先立ち出版された『京都大学文学部博物館考古学資料目録』の体裁を踏襲したとのことである。記載項目を具体的に挙げると、写真、目録番号、品名、品名英訳、数量、登録番号、記述（年代・出土地・材質・その他の特徴）、法量、受入年、受入経路となっており、品名英訳の存在に示されているように外国人研究者に対しても一定の便宜が図られている。例言末尾に外国人研究者が名を連ねていることはこれと決して無関係ではなく、言葉を変えれば、彼らが目録の編纂及びコレクションの学術的理解に少なからず寄与したことを示唆している。我が国を代表するエジプト学者が殆ど名を連ねていない点はやや不可解だが、そしてそのために目録の専門的価値は大きく損なわれてもいるが、この事実を差し引いても、1500 点に及ぶ所蔵品が白日の下に晒

されたことは高く評価されて然るべきである。美麗品に至ってはカラー図版（pp. iii-xviii）としても掲載されており、これを一瞥すればコレクションの価値は専門家ならずとも容易に理解できるであろう。続く目次（p. xxiii）、細目次（pp. xxiv-xxv）、古代エジプト史年表（p. xxvi）、エジプト遺跡地図（p. xxvii）は、いずれも秩序立てられており簡便である。

目録の大部分を占める資料目録（pp. 1-154）は、出土遺跡の明らかな所蔵品をナイル川下流から上流に向かってまず並べ、続いて、出土遺跡の不明な所蔵品を用途及び材質¹⁾に沿って並べたものとなっている。出土遺跡の詳細は、ダフネ、ナウクラティス、ファイユーム、オクシリニコス、バダリ、カウ・エル＝ケビル、エル＝マハスナ、コム・エル＝スルタン、アビドス、トゥク、デル・エル＝バハリ、テーベ、ゲベレイン、シナイ半島である。しかしながら、各遺跡概要は一切示されずまたこれを補完する関連文献（濱田 1911, 1912, 1923a, 1923b）も引用されていないため、読者は右も左もわからないまま所蔵品に出喰わすことになりかねないだろう。出土遺跡が明らかでないといわれる所蔵品も同様であり、実際、ここに混在しているパレスティナやスーダンの遺物については別項を設けて然るべきであったかもしれない²⁾。ただここで興味深いのは、京都大学工学部学生の中田荘一がおそらくアフリカ学術調査隊への参加の傍らサッカーで蒐集した土器や、リバプール大学教授の J. ガースタング（Garstang）が発掘したメロエ土器数点がコレクションに含まれていることである。この事実は、従来想定されていたよりも多くの人と地域を巻き込んでコレクションが形成されたことを示唆しており、結果的に、コレクションの価値にさらなる深みを与えるものとなっている。実際、評者の狭い管見に触れる限り、このメロエ土器は我が国にもたらされた初のスーダンの遺物であり、特筆に値する。

目録末尾に附された解説（pp. 155-161）は、コレク

ションの由来と特徴を論じている。正確には、「ペトリーと濱田」「エジプト遺物が京都大学にもたらされた経緯」「ペトリーが濱田に伝えたかったこととは」、という三項目で構成される3頁弱の文章であり、エジプト探査基金から濱田に送付された書簡が図版として添えられている。全体的な論調としては、W. M. F. ペトリー (Petrie) が濱田を通じて日本にもたらした考古学的研究法を高く評価するものとなっているが、ペトリーと濱田の関係性が述べられている一方、分担執筆者におそらく期待されていたであろうコレクションのエジプト学的位置づけの解説にはなっていないため、読者は、百数十頁にわたってここまで眺めてきた所蔵品がどのような歴史的意義をもつのか最後までわからぬまま、本書を閉じることになる。

以上が目録の概要となる。そしてここまでの議論から推察されるように、目録は、コレクションが日本考古学の発展に果たした役割に重きを置いているようである。着眼点自体は至極妥当といえるだろう。というのも、SD (Sequence Dating) 法を引き合いに出せばただちに了解されるように、コレクションが我が国の土器研究に与えた影響力はつとに指摘されているからだ (京都大学文学研究科考古学研究室・京都大学総合博物館編 2011: 40-41)。しかしながら、上述したようにコレクションのエジプト学的位置づけが考慮されているとはいえない。このことは、鈴木まどかの重要論考 (Suzuki 1980) が目録から抜け落ちている点にも看取することができ、実際、コレクションの由来や特徴はすでに彼女が鋭く指摘しているにもかかわらず、彼女の議論及び彼女が編んだ石製容器40数点のカatalogもまた見落とされているようである。コレクションの価値を深く理解し、その公開と活用を誰よりも望んでいただけに、彼女の研究成果が目録に活かされなかったことは極めて遺憾としなければならない。また、膨大な所蔵品を一冊に収めるべく簡略に終始せざるを得なかったことは理解できるが、少なくとも、出土遺跡の明らかな所蔵品についてはその典拠を示してしかるべきだっただろう。上述した石製容器のカatalogと比較すると、情報量や年代観の著しい齟齬が浮き彫りとなる³⁾。

本論をやや外れるが、目録の出版を記念して開かれたシンポジウムにも触れておかなければならないだろう。なぜなら、From Petrie to Hamada: Egyptian Antiquities of Kyoto University と題されたこのシンポジウムではまさに、コレクションのエジプト学的位置づけの検討が試みられているからだ。出版物 (Amijima ed. 2016) を実際に紐解いてみると、コレクションの来歴や学術的価値が国内研究者及び外国人研究者によって多角的に論じられており、また、コレクションに含まれるギリシア語とコプト語史料 (パピルスやオストラカ) に対しても文献学的記述が施さ

れており、極めて有益である。ひるがえって述べれば、目録には最低限の情報しか添えられていないため、コレクションを深く理解するためには本出版物が必要不可欠である。両者が有機的に提示されていたならばどれほど読者の助けになったであろうか。読者の便宜を考えて、所収論文の題目だけでもここに列記しておく⁴⁾。

最後に、コレクションと我が国のエジプト学の関わりについて若干補足しておく。コレクションが濱田によって将来されたという事実は、濱田がエジプト学に大きな興味を抱いていたという印象を読者に与えるかもしれないが、これは必ずしも正しいとは言えない。あくまで濱田は日本考古学の発展を目論んでいたからだ。この意味で、エジプト学ではなく日本考古学とコレクションの関係性に重きを置いた目録編者の試みは、まさに正鵠を射ている。とはいえここで見逃してはならないのは、京都大学文学部陳列館に展示されていたコレクションと出会ったことにより、同大学で学んでいた岡島誠太郎が古代エジプトへのめり込み、結果的に我が国のエジプト学研究を切り開いてゆくことである。このような観点から眺めれば、岡島 (1928a, 1928b) の研究対象となったネフェルヘテプセネブの供養碑とネフェルティティ王妃像複製こそが、コレクションと我が国のエジプト学研究を結ぶ最も太い糸と言っても過言ではないであろう (たとえば加藤 1958)。評者の拙い指摘はともかくとしても、目録をきっかけとして一人でも多くの人が古代エジプトに興味を抱くとともに、コレクションが我が国のエジプト学の発展に役立てられてゆくことを願って止まない。

註

- 1) 土製品 (土器、土製ランプ、土製紡錘車、護符)、石製品 (石器、パレット、玉石、棍棒頭、石碑、石製容器、石製紡錘車、石製建具、砥石、彫刻、シャブティ、ビーズ飾、スカラベ、スカラベ痕のある封泥、護符)、ファイアンス・ガラス製品 (ファイアンス製シャブティ・像、ガラス製容器、ビーズ飾、各種ファイアンス・ガラス製品)、木製品 (木製鷹形、木製櫛・筆記具、木棺、木彫)、布・繊維製品 (ミイラ布、織物、布製袋、草鞋)、革製品 (革製袋・革製杓)、象牙・骨・貝製品 (象牙製容器・環・針、骨製紡錘車・刺突具・象嵌、ビーズ飾、貝殻)、金属製品 (金製護符・金貨、青銅製・鉄製武器、青銅製留金・針、青銅製化粧用具・護符)、パピルス (手紙、そのほかの文書)、そのほか (ミイラ、ミイラ棺、穀物、レプリカ)。なお、「スカラベ痕のある封泥」は指輪型印章痕のある封泥と記述すべきかもしれない。
- 2) 評者が確認した限り、エジプトではアスワン、サッカラ、テーベ、ピトム、ファイユーム、マハスナ、パレスティナではジェンメ、テル・ファラ、ベト・ベレト、スーダンではメロエの遺物がここに含まれている。
- 3) さらにいくつか不備を指摘しておく、目録では Roman Period がローマ皇帝と訳されていたり (p. xxvi)、「浜田耕作」と「濱田耕作」で表記が揺れていたりする。

- 4) Publication of 'Catalogue of the Egyptian Collection in the Kyoto University Museum' (Hideki Sakaguchi) / Small pieces can tell: the richness and diversity of the Kyoto university museum's Egyptian collection (Tomoaki Nakano) / Artefacts of Excavation: the international distribution of finds from British excavations in Egypt 1880-1980 (Alice Stevenson) / The Coptic textiles in the Egypt Collection of Kyoto University Museum: Spectroscopic Analysis of Dyes, Radiocarbon Dating and $\delta^{13}\text{C}$ analysis (Misao Yokoyama) / Old and new excavations at Naukratis and the significance of the Kyoto University Museum collection (Ross Iain Thomas) / The papyrological collection of the Kyoto University Museum (Todd M. Hickey) / Coptic textile technology: skillful combination of linen and wool (Junko Higashimura) / Non-destructive observations and species identification of the Egyptian 'mummified ibis' owned by the Kyoto University Museum (Hiroshige Matsuoka et al.).

参考文献

Amijima, T. (ed.) 2016 *Proceedings of the International Symposium on From Petrie to Hamada: Egyptian Antiquities of Kyoto University*. Kyoto, Kyoto University Museum.

- Suzuki, M. 1980 La collection égyptienne de l'Université de Kyoto. *Mediterraneus: Annual Report of the Collegium Mediterranistarum* 3: 61-88.
岡島誠太郎 1928a 「ネフェル、ヘテプ、センブの碑石」『史林』13巻1号 172頁。
岡島誠太郎 1928b 「ネファティティ像とアマルナ彫刻とに就て」『史林』13巻4号 75-85頁。
加藤一朗 1958 「京都大學考古學教室藏ネヘルヘテプセネブ石碑について」石濱先生古稀記念会（編）『東洋學論叢—石濱先生古稀記念—』48-53頁 石濱先生古稀記念会。
京都大学文学研究科考古学研究室・京都大学総合博物館（編）2011『埃及考古—ペトリと濱田が京大エジプト資料に託した夢—』アクティブ KEI。
濱田耕作 1911 「埃及美術の起源に就て」『藝文』2巻4号 26-39頁。
濱田耕作 1912 「埃及に於ける希臘殖民地」『藝文』3巻1号 97-106頁。
濱田耕作 1923a 「埃及発掘事業と其の考古学上の功績」『太陽』29巻5号 89-94頁。
濱田耕作 1923b 「京都帝国大学新著の埃及古物」『史林』8巻1号 122-131頁。

坂本 翼

独立行政法人国立文化財機構

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

Tsubasa SAKAMOTO

*International Research Centre for Intangible Cultural
Heritage in the Asia-Pacific Region,
National Institutes for Cultural Heritage*

